

サー・ウォルター・ローリーのガイアナ計画

井野瀬 久美恵

【要約】 従来、サー・ウォルター・ローリーのガイアナ遠征（一五九五、一六一七年）は、黄金発見の賭けと解され、ヴァージニア植民事業に対する高い評価とは対照的に、極めて低い評価しか与えられてこなかった。本論考では、従来の研究に見られる様々な問題点から、ローリーが彼の後半生を費した構想をガイアナ「計画」と捉え、生前未公刊の彼の諸論文を史料に加えることによつて、なぜガイアナなのかという計画の誕生に至る過程、計画の具体的な内容、及び計画の限界や失敗の本質の再検討を試みた。その結果、ローリーのガイアナ計画は、軍事、非軍事の両面からスペイン帝国の打倒とそれに代わるイングランド「帝国」の確立を意図した戦略的な植民論であったこと、そして、一七世紀初頭、彼の計画の継承者たちが行なったガイアナ植民が西インド諸島植民の基点となっていたこと、を明らかにした。

史林 六八巻六号 一九八五年十一月

はじめに

スペイン無敵艦隊に対する勝利に続くエリザベス朝末期（一五八九—一六〇三）は、文字通り、スペインとの戦争に終始した時代であった。ヨーロッパを越えて大西洋上へと拡大したこの戦争によつて、ヨーロッパの一大覇者、スペインが国力を依拠する西インドは戦略上の要衝とみなされ、この正当な口実の下、西インドへの海上発展は、一五九〇年代、最初のピークを迎えることになった。^①

この期、西インドへ向かった航海者たちの大半は、手段として、スペイン銀船隊の拿捕、スペイン人入植地への奇襲、並びに掠奪をとっていた。それは、王室海軍力の整備、充実を欠いたイングランドにおいて、私掠活動のみが、唯一対ス

ペイン海戦の武器となり、戦略的思惑を体现できる手段であった、^② という事情による。しかしながら、対スペイン戦の重心が陸戦から海戦へと移行していく一五九五年以後、私拿捕という行為には、戦略的にも、また発展の将来性にも限界があることは、次第に明らかとなっていた。

ここに、イングランドにおける「言葉の最も深い意味における帝国主義者」リチャード・ハクルートの唱える、「徐々にスペインの領土独占を掘り崩し、教皇の禁令などは意に介さず、西インドにも自国の植民地を建設するという政策」^④ の重要性がある。一五八四年、女王に献呈された彼の『西方植民論』は、対スペイン強硬姿勢に貫かれた植民論であり、イングランドの本格的な帝国主義的膨脹の開幕を告げる書であった。そして、同書の執筆期以上にスペインの脅威が切迫しつつあった一五九〇年代、さらに検討を加えてこの政策の可能性を追求した人物こそが、ハクルートのパトロン、サー・ウォルター・ローリー Sir Walter Raleigh（一五五二—一六一八）である。「かつて私が生きてきた時代のように、今〔一五九五年〕は、掠奪の航海に出ることなど、望めそうにない」^⑤ と考えたローリーは、一五九五年、当時西インドと呼ばれた地域の東の端、南米北東部に位置するガイアナへと遠征し、以後、この地を中心にスペイン帝国打倒策を模索し続けたのである。

エリザベス朝時代の海外発展史上、ローリーは、ハクルート、そしてニューファウンドランド植民を手がけた異父兄サー・ハンフリー・ギルバート^⑥ と並ぶ植民推進者として、不朽の名をとどめている。特に、一五八四年以降、彼が、ギルバートの構想の後を受け、ハクルートの『西方植民論』を理論的な支柱として行なった北米ヴァージニア植民事業については、D・B・クインを始めとする欧米の研究者のみならず、我が国においても、史料整理やその分析が進められてきた。^⑦ しかしながら、同じくローリーの手になる、しかも、ギルバートやハクルートの直接の影響から脱したという点から考えれば^⑧ 全くローリー独自の構想をもとに実行に移されたガイアナ遠征に関しては、極めて低い評価しか与えられてはいない。すなわち、ガイアナ遠征から帰国後、彼が著わした『広く豊けく美しきガイアナ帝国の発見』^⑨（一五九六年公刊。以下、『ガ

「イアナ帝国の発見」と略すを、「人間のばか正直さにつけこもうとした嘘の中で、最も粗雑で見掛け倒しの嘘で満ち満ちている」と評したD・ヒュームの記述に見るように、従来ガイアナ遠征は、同書の中でたびたび繰り返される黄金を求めた航海として、また、女王の女官、エリザベス・スロックモートンとの秘密結婚によって失った女王の寵愛を回復するための冒険として、理解されてきたのである。現在に至るも、A・L・ラウスやE・ウィリアムズらの見解に見られるように、ローリーのガイアナ遠征は、大航海時代の渦中にあつたイングランドの一エピソードとしか捉えられてはいない。わずかに、ローリーのヴァージニア植民事業を高く評価するD・B・クインは、それと同じ動機、すなわち植民をガイアナ遠征にも認めてはいる。^⑩しかし、ローリーは植民には不適當な私掠活動と根本的に同じ方法——スペイン領からの黄金の奪取——によって植民地を築こうとしたがゆえに、ガイアナ遠征は「賭け」Guiana Gambleであつた、と考える点で、クインもまた、通説を踏襲しているのである。

確かに、ローリーがガイアナに着目する契機となつたものは、著作や書簡の中でしばしば繰り返される黄金郷、エル・ドラードの伝説であつた。また、処刑と背中合わせで行なわれた一六一七年の第二回ガイアナ遠征こそは、D・B・クインの指摘するように、黄金を持ち帰ることができるか否かの賭けであつたといえるだろう。^⑪

しかし、ガイアナ遠征をローリーの黄金欲からのみ説明しようとする従来の評価には、次のような問題点が指摘される。第一に、従来の研究が『ガイアナ帝国の発見』のみに依拠してきたという、史料上の問題である。

ガイアナ遠征の準備期間を含む一五九二年から九七七年にかけて、ローリーは、女王から宮廷追放を言い渡され、故郷に程近いドーセット州のシャーボン城に蟄居を命じられていた。ヴァージニア植民事業の拠点となつたロンドンの彼の邸、ダラム・ハウスに代わり、ガイアナ遠征計画の「司令部」となつたのは、この居城に他ならない。ところが、ここでの遠征準備に関わる彼の活動、特に遠征の目的をはっきりと示す史料は、ほとんど残されていないのである。^⑫そのため、多くの研究者たちは、唯一公刊された『ガイアナ帝国の発見』のみを遠征分析の史料として考えてきた。

しかしながら、後に詳しく見るように、ローリーは、一六一七年の再遠征に至るまで、継続的にガイアナとの接触を図る傍ら、同書以外にも、生前未公刊ながら、実に様々なテーマを扱った論文を手がけている。例えばその中の一つ、「ガイアナ航海について」と題する論文は、遠征の弁明とガイアナに対する人々の関心を煽るといふ目的ゆえに後世の歴史家たちの批判的となる多少の虚飾を交えて書かれた、しかも冒険物語的色彩の濃い『ガイアナ帝国の発見』を補完すべく、同書公刊後、二、三年のうちに書かれたものである。そして、この論文では、次に述べる第二の通説批判と密接に関連する対スペイン戦略が、極めて具体的に描かれており、通説が強調する黄金に関する言及は、ガイアナの熱帯産品紹介の中でただ一ヶ所に過ぎない。ガイアナにおけるローリーの構想を知る上で、『ガイアナ帝国の発見』とともに、あるいは同書以上に重要なこの論文を抜きにして、ローリーのガイアナ遠征を評することは、片手落ちといえるであろう。さらに、植民、通商、スペインを中心とするヨーロッパ国際情勢等々を扱った論文の中にも、各々のテーマにひきつけて、間接的にはあってもガイアナに論及したのも多く、ガイアナでの構想の多面性、展開を知る手がかりとなろうかと思われる。

第二に、これまでの研究の中では、ガイアナ遠征が当時の国際情勢、とりわけ、対スペイン戦に関するローリーの幾多の言動とは無関係なもの、もしくは、別次元の行動として論じられてきたこと、を指摘することができよう。ローリーがガイアナへ向かう一五九五年直前のイングランドでは、第二回スペイン無敵艦隊来襲の噂が飛びかい、対スペイン戦の前哨線となる彼の出身地、西部地方を中心に、防衛の再強化が急がれていた。この緊迫した状況の中、しかも、デヴォン、コンウォール両州の軍事、治安維持責任者の立場にあったローリーが、単なる黄金欲だけから、イングランド人未踏の処女地、ガイアナへ向かったとは考え難い。また、国際情勢の流れの中でガイアナ遠征を考察しなければならないことは、後述するように、特に、一六一七年の再遠征に関して強調されることもある。

三つ目の問題は、従来の研究が、第一回遠征以後、ローリーが継続的にガイアナへ派遣したローレンス・ケイミスやトマス・メイシャムら、さらには、ジェイムズ一世時代、獄中のローリーの経済的、理論的助言を仰いでガイアナへ向かっ

たロバート・ハーコートやトマス・ロウらによって、ガイアナが次第に、はっきりと植民の地として捉えられていったという事実、及び、この事実とローリーの遠征との関係を見落としてきたことにある。この問題は、後に第三章において詳述するつもりであるが、それは、一七世紀中葉以降に本格化する西インド諸島における植民活動とも深く関わっているがゆえに、重要な問題であると思われる。また、ガイアナ植民との関連においてローリーの遠征を捉えるというこの視点は、続く商業革命の時代を生きた一知識人、ダニエル・デフォーが『サー・ウォルター・ローリーの航海と冒険の歴史的记录』(一七二〇)の中で指摘した、ガイアナ遠征に見られる「計画性」、とも通じるものであろう。^⑧

以上のことから、本論考では、従来、評価の対象とされてきた一五九五年と一六一七年の二度のガイアナ「遠征」だけではなく、準備期間に当たる一五九〇年代前半、並びに第一回遠征からの帰国以後へと考察範囲を広げ、その間のローリーの構想全体をガイアナ「計画」として捉えることにしたい。また、考察の対象も、遠征の事実経過ではなく、構想そのもの、そしてその展開に絞ることにする。その上で、これまであまり取り上げられることのなかったローリーの諸論文を分析史料として広範に用い、表面上の華々しい活動や劇的な人生の陰で、ともすれば忘れ去られてしまいがちな海外膨脹論者としてのローリーにも光を当てたいと思っている。

ローリーがガイアナに求めた計画とは何だったのか。その計画は、スペインとの平和条約締結(一六〇四)以後、西インドが金、銀の掠奪の地から入植の地へと捉え直されていく国内外の動向の中で、どのような意味をもっていたのか。さらには、こうした分析を通して、西インド植民前史の中でガイアナ植民が果たした役割をも考えていきたい。

① 一五八五—一六〇三年の間に、カリブ海域への航海は235を数えるが、

一五九〇年代にはその約85パーセントに当たる193の航海——遠征と呼ぶものが56、それ以外は個人単位のものである——が集中している。

⁸⁰ D. B. Quinn & A. N. Ryan, *England's Sea Empire, 1550-1642*,

1983, p. 123.

② *Ibid.*, p. 88. なお、エリザベス朝時代の海軍については、*Ibid.*, pp. 49-69を合わせて参照されたい。

③ エリック・ウィリアムズ(川北稔訳)『コロンブスからカストロまで——カリブ海域史一四九二—一四九九——』(全二巻) Ⅰ、岩波

現代選書、一九七八年、八六頁。

- ④ 同訳書、I、八五頁。
- ⑤ Sir Walter Raleigh (ed. by William Oldys and Thomas Birch), *The Works* (8 vols.), vol. VIII, 1826 (2nd. ed., 1965), p. 381 (『*Works*』以下)。
- ⑥ 例へば、K. R. Andrews, *Trade, plunder and settlement, Maritime enterprise and the genesis of the British Empire, 1480-1630*, 1984, pp. 183-99 を参照せよ。
- ⑦ D. B. Quinn (ed.), *New American World: A Documentary History of North America to 1612*, (5 vols.), vol. 3, 1979 を参照せよ。欧米のヴァージニア植民研究の中心は Quinn & Ryan, *op. cit.*, pp. 12-18 の研究史を、また、我が国における研究の中心は『イギリスの航海と植民』I、《大航海時代叢書》第Ⅱ期第一七巻、岩波書店、一九八三年、五二一-五二頁、安居宏「ウォルター・ローリー卿の北米植民事業」『西洋史年報』一一号、一九八五年、一六一-三二頁を参照せよ。なお、安居論文はローリーの生前未公開の議論文には目を通していなさうだが、本論考では、それらを広植に史料として活用した上で、「一五九〇年代にローリー卿が北米植民事業から遠ざかっていたのも彼の事業家としての才覚がそのようさせた」(同論文、二九頁)と考える同論文とは、見解を異にしている。次の注⑧も合わせて参照せよ。
- ⑧ ハクルートは「一五九〇年頃、すなわち、第二回ヴァージニア植民がロスト・コロニー Lost Colony に終わった頃から、ガイアナ計画に集中し始めたローリーのハトコロネジを離れ、北米植民の再興を、ローリーのライバルでもある秘書長官ロム・セシルに託し、彼の後植を得ている。以後の北米植民の発展には、セシルの寄与するところが大きい。Quinn (ed.), *op. cit.*, vol. 3, pp. 363ff.」
- ⑨ Sir Walter Raleigh, *The Discoverie of the Large, Rich and Beautiful Emphyre of Guiana, with a relation of the great and golden cities of Manoa (which the Spaniards call El Dorado). And of the Province of Emeria, Arramand' Amapaia and other Countries, with their rivers adjoining, 1596*. 本論考は Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 379-467 を参照せよ『*グレートブリテン帝国の発見*』以下を参照せよ。
- ⑩ David Hume, *The History of England*, (5 vols.), vol. III, 1754-61 (1864), p. 491.
- ⑪ A. L. Rowse, *The Expansion of Elizabethan England*, 1955, p. 222; ヴァリンダス、前掲訳書、I、八八-九〇頁。また、Edward Thompson, Philip Edwards, Robert Lacey のローリーの伝記作家、及び、Anthony Esler, *The Aspiring Mind of the Elizabethan Younger Generation*, 1966, pp. 170-81 を参照せよ。
- ⑫ D. B. Quinn, *Raleigh and the British Empire*, 1947, pp. 162-208.
- ⑬ *Ibid.*, pp. 240-69.
- ⑭ 遠征準備に関する史料は「一五九四年、ガイアナ調査のためにローリーが派遣した Jacob Whiddon の存在、同年十二月の女王からの遠征許可状、ロム・セシルからの資金援助、チャールズ・ハワードからの持ち船提供の記録に留まる。また、遠征を仄めかすものも、ローリーの妻がセシルに宛てた一五九四年二月八日付の手紙にある、「主人を西ではなく東へ行くように説得して欲しい」という一文が残っている。例へば、Edward Thompson, *Sir Walter Raleigh, The Last of the Elizabethans*, 1935, pp. 96-99 を参照せよ。
- ⑮ ローリーの著作、論文は、その内容から次の九つに大別される。(一)ガイアナ関係——『ガイアナ帝国の発見』以外に、*Of the Voyage for Guiana*, 'Journal of the Second Voyage to Guiana', 'Apology'

(C) 植民論——'Causes of the Magnificency and Opulency of Cities' (主に原住民政策を扱つてゐる)

(D) 国際情勢——特に対スペイン戦に関する論文——'A Discourse of War in General', 'A Relation of Cadix Action', 'Orders to Commanders', 'On a Match between Lady Elizabeth and the Prince of Piedmont', 'On a Match between Prince Henry and a Daughter of Savoy'

(E) 海軍強化論——'Observations of the Navy and Sea-Service', 'A Discourse of the Invention of Ships, Anchors, Compass etc.'

(F) 交易論——'Observations touching Trade and Commerce'

(G) 政治、統治論——'Maxims of State', 'The Cabinet-Council', 'The Prerogative of Parliaments', 'On the Seat of Government'

(H) 歴史関係——*History of the World* (1614), 'The Reign of William the First', 'A Discourse of Tenures which were before the Conquest'

(I) 教育論——'Instructions to his son and to Posterity', 'The Advice of a Loving Son to his Aged Father'

(J) 宗教論——'The Sceptic', 'A Treatise of the Soul'

当時の宮廷人の慣習に従ひ、ローリーも著作に日付を記さなかつたため、生前に公刊された『ガイアナ帝国の発見』と『世界史』以外は、一五九〇年代の登居期間から一六〇三年以降の投獄時代にかけて書かれたということがわかっているだけで、正確な執筆年代は不明である。しかしながら、筆者が目を通した限り、ガイアナ計画の要ともいえる対スペイン観に関して、ローリーの主張には些かの変化も見られない。そして、彼の植民論や海軍強化、通商論がその上に築かれていることを考え合わせて、本論考では、J・W・アレンの次のような

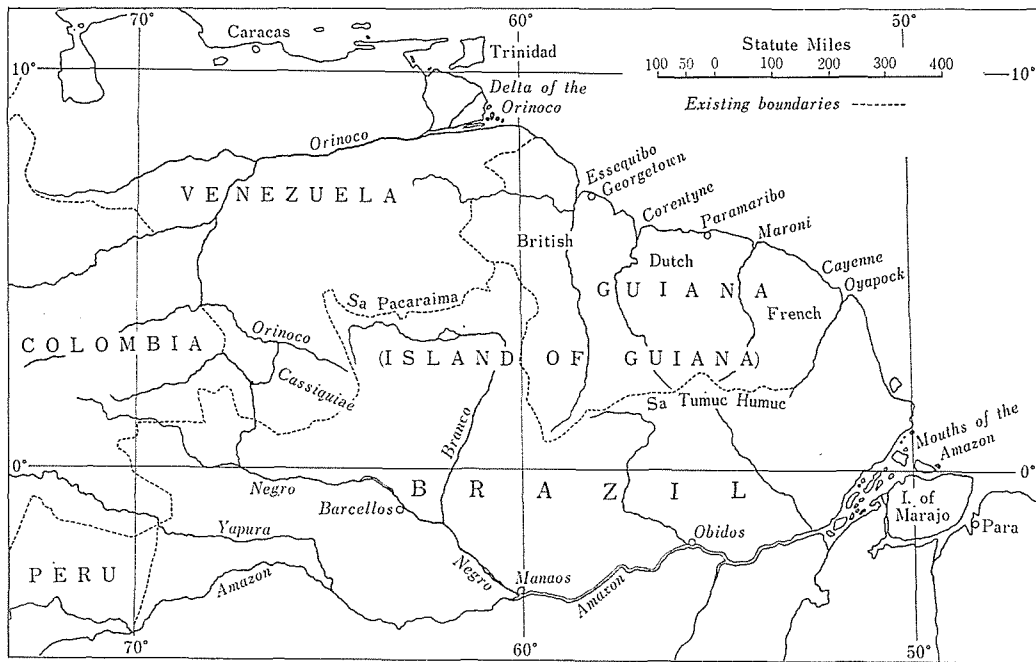
指摘に従うこととした。「正確な著作のシロノロシーはこの「ローリー」の場合、問題ではなからず、なぜなら、「ローリーの」見解は、いかなる変化の調子も見当たらないからである。表明された見解は、誰もが予測してゐたように、全く典型的なエリザベス朝人のものである。」
J・W. Allen, *English Political Thought 1603-1660* (2 vols.) vol. 1, 1938, p. 63. 同様の指摘は、E. A. Struthmann, *Sir Walter Raleigh: A Study in Elizabethan Scepticism*, 1951, p. 169; Douglas Bush, *English Literature in the Seventeenth Century*, 1954, p. 234 によらる。

⑨ Sir Walter Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana' in *The Discoverie of the Large, Rich and Beautiful Empire of Guiana* (ed. by R. H. Schomburgk) Hakluyt Society, 1st ser., NO. III, 1848, pp. 135-53. この論文は、一九世紀中葉まで、手稿のまま大英博物館に保存されてきた (Sir Hans Sloane MSS., 1133, fol. 45)。

⑩ ローリーは、一五八五年九月以来、ノンウォール州統監 Lord Lieutenant of Cornwall, 並びに艦隊司令長官 Lord High Admiral of 西部三州、ノンウォール、デヴォンの代理人に当たるヴァインズ・ブード、ラル Vice-Admiral of Cornwall and Devon の職に在った。事実上の対スペイン戦の開始の年である一五八五年のこの任命は、祖国防衛の前哨線となる西部地方で信望の厚いローリーの、軍人としての手腕を期待してのものと思われ。

⑪ Daniel Defoe, *An Historical Account of the Voyages and Adventures of Sir Walter Raleigh*, 1720. キンキーは、『南海貿易論』(一七一二)、『南海貿易の意図と利益の真相説明』(一七一三)と共に、南海会社に対する助言として、同書を著わし、その中で、ローリーのガイアナ遠征に見られる計画性を高く評価している。

ガ イ ア ナ



Robert Harcourt (ed. by C. A. Harris), *A Relation of a Voyage to Guiana*, Hakluyt Society, 2nd ser., No. LX.

南米北東部、スペインッシュ・メイン Spanish Main とよばれるスペイン人入植地に隣接し、オリノコ川とアマゾン川とに挟まれた地域全体——これが当時のガイアナである。この地へスペインは、奇しくもローリーがヴァージニア探検、植民事業に着手した同一五八四年、齢六〇才を越える経験豊かな軍人、アントニオ・ペーリオを送り、オリノコ川河口のトリニダード島を拠点に、本格的なガイアナ奥地への探検に乗り出している。以後、三度に渡る探検の後、ペーリオは、一五九三年四月二三日、ガイアナ全域をスペイン領ヌエボ・ドラード *Nuevo Dorado* として公式の領土宣言を行ない、原住民のキリスト教への改宗活動を開始した。^①この事實は、翌九四年、スペイン本国へガイアナの正式なスペイン領化を知らせる書簡を運ぶスペイン船を拿捕したジョージ・ポバム船長から、期を移さずローリーのもとへ伝えられている。^②すなわち、遠征直前のローリーが理解するところによれば、また、事實、主権を宣言したスペインにとっても、ガイアナは、極めて新しく開かれた地であったといえる。

では、なぜ、ローリーはこの新しいスペイン領土に関心を集中していったのか。通説のいう、エル・ドラードの伝説も、その契機とはなつたと思われるが、ガイアナ計画の本質を考える上で重要なこの問いに対しては、本論考の冒頭で提示した二番目の通説批判と関わるK・R・アンドルーズの見解が注目されよう。アンドルーズは最近著『交易、掠奪、植民』(一九八四)において、ガイアナでの黄金発見の望みは、「少なくともローリーの場合、反スペインの策略と結びついていた」^③と述べ、エリザベス朝末期、イングランドが最も苦慮していた対スペイン戦という状況の中に、ローリーのガイアナ遠征をはっきりと位置づけている。

事實、一五九〇年代、ローリーの最大の関心事は、出身地での職務から、また、一五九三年の議会発言からもわかるように、対スペイン戦の動向にあった。また、それは、彼の残した論文の多くが、直接的に、あるいは各々のテーマにひき

つけて、スペインとの戦争に言及していることから明らかである。さらに、『ガイアナ帝国の発見』の冒頭、読者に宛てて、彼は次のように訴えている。

「ヨーロッパ諸国を危険に曝し、不穏な状況へと追い込んでいるのは、彼「スペイン王」の有する西インドの黄金である。その黄金で「スペイン王は」情報屋を雇い、ヨーロッパの偉大なる君主の国々で、会議へのび込み、「君主に対する臣民の」忠誠までも自由自在に操っている。」^⑤

それゆえにスペインを打倒するにはその国力の源泉たる西インドから始めるべきだとするローリーの主張は、既に述べたように、当時、広範に受容されていた理解に立つものであったといえよう。しかし、彼は、自らが参画したいくつかの遠征や彼の下へ送られた船乗りたちの情報から、その手段としての私掠活動には次のような否定的な見解を表明している。

「ありきたりの財宝を掠奪するために、岬から岬へとあちこちを走り回ることは、私が今日、女王陛下の恩寵によってイングランドに有している名誉ある官職にふさわしいことではなかった。」^⑦

また、ウィリアム・ホーキンスやフランシス・ドレイクらが行なったカリブ海域での奇襲についても、彼は次のように述べて、その戦略上の有効性には懐疑的であった。

「スペイン王は、我々が考えるように、アメリカの三、四の港町を押えたところで、微動だにしないだろう。」^⑧

こうして、ローリーは、当時、対スペイン海戦の常套手段であった二つの方策——「銀の封鎖」silver blockade、すなわち、西インドからスペインへの銀の流れを「海上で」遮断すること、並びに、西インドのスペイン人入植地やスペイン本土に対する「直接的な」軍事行為——を改めない限り、戦略的に有効な策はとり得ないことを強調するのである。そして、対スペイン戦略という観点から、西インドにおけるスペイン人の入植状況を分析し、イングランドにとって圧倒的に不利な海上での武力衝突に代わる新しい対スペイン戦略、及びその実行の場を模索していった。『ガイアナ帝国の発見』の冒頭には、こうある。

「私〔ローリー〕は、ささやかな能力と信念に従って、私の生涯をかけて努めてきた。我々に見返りの利を約束するような、もしくは、少なくとも、スペインの全く平穩な航路と豊かな通商を妨害したり、その独占を非難、攻撃したりするような、ありとあらゆる試みを押し進めるために——」^⑩

そして、この試みのために選ばれた地こそがガイアナに他ならない。

では、なぜガイアナなのか。対スペイン戦略に計画の主眼が置かれていたことを明らかにしたところで、この点を改めて問い直す必要がある。

その第一の理由は、ローリーによれば、ガイアナには、ヌエバ・エスパニーヤ〔今のメキシコ〕やペルーのような確固たるスペイン支配が及んでいないことである。

彼は、フランシス・ロペスの『西インド概史』やホセ・デ・アコスタの『新大陸自然文化史』、また、捕虜にしたスペイン人航海者で植民地行政にも携ったことのあるペドロ・サルミエント・デ・ガンボアやスペインに帰化したイングランド人たちの情報を精力的に収集、研究し、スペイン人のガイアナ探検、入植の歴史、本章の冒頭で述べたスペインのガイアナ支配の現状を分析した結果、次のように結論している。

「この帝国〔ガイアナ〕は、女王陛下とイングランドのために予約された地のように思われる。というのも、この地の探検を試みた全てのスペイン人たちは不成功に終わっているからである」^⑪。また、別の論文では、こうも記している。「スペイン王はガイアナ皇帝を自称しているが……では、『アイルランドの』リメリックを占拠し、要塞を一つ築いただけで、果してアイルランド王を称することができるのだろうか」^⑫

次いで、ローリーは、海流や風によって、イングラランド⇄ガイアナ間の航行が、他の西インド諸地域と比べて容易でしかも安全であることを挙げている。^⑬さらに、第三の理由として、ガイアナの地形が、陸路によるスペイン人入植地への侵入に有利であり、しかも、カリブ海諸島と比べて防衛がたやすいことを掲げて、この理由を最も強調している。

「海路からガイアナへ進む入口は、一つだけ〔オリノコ河口〕である。……陸路で〔スペインッシュ・メインからガイアナへ〕接近することは、〔海路以上に〕難かしい。……それゆえに、立派な要塞を一つ維持すれば、あるいは、確固たる都市を一つ築きさえすれば、〔ガイアナ〕帝国全体の防衛が可能となる。」¹⁶

分けても、ローリーの関心は、複雑に入り組んだ川の状況に向けられた。ガイアナには、オリノコ川とアマゾン川、並びにその支流、さらにはガイアナ高地から流れ出る河川が、網目状に広がっているが、それらを利用して、一つの水系から別の水系への移動が比較的容易であることは、第一回遠征以後、ローリーがガイアナへ派遣したケイミスやメイシャムらが、ローリーに宛てた報告の中で繰り返し強調していることでもある。¹⁷

以上の理由から、ローリーは、ガイアナを拠点とすれば、河川を利用して徐々に内陸部へと進むことによつて、「背後から」、西インドのスペイン支配を掘り崩すことができる、と確信するに至つたのであつた。それは、スペインに対するイングランド海軍力の劣性を率直に認めた上での、いわば、弱者の戦略と見ることができよう。しかも、ローリーはこの戦略によつて、「全ての〔イングランド〕人が切望する願ひ——スペイン王領以上に豊かな西インドを女王に——に應える」¹⁸こともできると考えている。ここに、海路のみに頼つてきた従来的手段に代わる新しい対スペイン戦略と、ガイアナに着目する契機となつた黄金郷伝説とが、彼の構想の中では、矛盾なく、むしろ不可分に結びつていたことが認められよう。そして、黄金発見という謳い文句は、彼の計画に対する人々の支持と関心を高める、最高の効果をあげることが期待されたのであつた。

しかし、西インドに対してスペインが主張する排他的独占権に抵触する彼の戦略には、「教皇庁から任命権の下にスペイン王に与えられた完璧な法の壁」¹⁹を崩し、ガイアナをイングランド領とするに足る根拠、いふなれば、戦略政策を可能ならしめる理論上の武装こそが、何にもまして必要とならう。そのためにローリーが持ち出したのは、ガイアナを選んだ第一番目の理由、すなわち、スペインのガイアナ支配は単なる土地の占拠に過ぎず、実体を欠いたものでしかないこと、

から着想を得たイングランドとガイアナ原住民諸部族との同盟である。

彼は、第一回ガイアナ遠征中、原住民との接触を重ねる過程で、彼らの間に存在する敵対関係が、スペイン人の侵入後は、対スペイン意識の相違に根ざす対立へと転化したことを知った。そして、ガイアナにイングランドの拠点を築くためには、「抑圧と侵奪……原住民を故地から追放したがために……こうつきで貧しい小部族、アルワカン族の他には歓迎する原住民など全くない」^{②4}スペイン人のやり方とは対照的な方策で、原住民諸部族に当たる必要がある、と考えたのである。すなわち、ローリーは、公式にスペイン領化されて間もないというガイアナの状況を考慮に入れた上で、この地でスペイン人が植民地経営を行使する際に首枷となっている原住民諸部族のスペインに対する敵意、さらには彼らの間の根強い対立関係を巧妙に利用し、スペインの「名目上の」支配と対峙する形で、イングランド女王の偉大さ、慈悲深さ、彼女の庇護を受ける利点を説いて回り、原住民と同盟関係を次々と結ぶことにより、ガイアナにイングランドの「実質的な支配を確立しようとしたのである。オリノコ川とカロニ川の接点に位置し、モレキートという交易港を有する原住民の有力部族の国、カオロ国の長 *Cassique* で、先王を殺したスペイン人を激しく憎悪していたトピアワリとの連合がその好例となろう。そして、ローリーは、この友好姿勢を前面に押し出すことによって、戦略上不可欠であるガイアナの地形やスペイン側の動きに関する情報を、継続的に得ることができたのである。さらに、「私〔ローリー〕は、この地域の原住民たちを、スペイン人専制から守り、解放するために来たのだ」^{②5}と明言することにより、イングランドとは気候も風土も全く異なるガイアナで、実質的な戦力を原住民に期待することも可能となった。ローリーは、「ガイアナ航海について」の中で、対スペイン戦力としての原住民に言及して次のように書いている。

「ガイアナ原住民に対して我々〔イングランド人〕が果たすと申し出たことは、次のことである。第一に、スペイン人や他のいかなる侵略者からも、彼ら〔原住民〕や彼らの妻子、国を守ること。……そして、最後に、戦闘で役立つように、彼らに、武器の使い方、砲の投げ方、武具や大砲の作り方、馬の扱い方を教えることである。そして、この最後の

点こそが、（真実を申せば）この論文における私の狙いでもある。……（「というのも」我が国では、ガイアナを征服するために、あるいは占拠するためにすら、十分な人員を割けない状況にあり、原住民の援助なくして……本国やペルー、ヌエバ・エスパーニャ、ヌエバ・グラナダ、カリブ海諸島や他の領地から軍隊を結集して我々を撃退しようとするスペイン人に対処することはできないからである。……微に入り細に互り、原住民を武装させるといふこの政策が、極秘事項として、慎重に進められ、それが熟し、公然たる行動に移されるまで秘密にされんことを「注意されたい」。

ここに、はっきりと、ガイアナ遠征の特徴としてたびたび言及される対原住民友好姿勢の背後に、ガイアナの現実と当時のイングランドの軍事力の実態^⑤とを考慮した、スペインに対する戦略的配慮が働いていたことを認めることができよう。すなわち、対スペイン戦の渦中で生まれたガイアナ計画は、単にスペインの国力の源に押し入って黄金を奪うという消極的な「掠奪」計画ではなく、より積極的に、原住民との同盟関係を築き、スペインの植民地支配が貫徹していないガイアナを基点に、スペイン帝国の打倒を狙った戦略構想であったと分析できる。

ここで、改めて、ガイアナ計画とは、一五九五年の遠征以後、その時の経験、及び、彼が引き続き派遣した配下の航海者たちからの報告に基づいて、次第に具体性を増し、一六一七年の再遠征に至るまで継続されるローリーの構想であったことを想起していただきたい。その間、二十年余りの間に、イングランドでは、王朝交替を経て宮廷内の状況も、また、新王ジェームズ一世が結んだ平和条約によって対スペイン公式外交も、大きく変化している。^⑥ローリーは、こうした国内外的変化に対応して、計画の内容を、次第に、戦略という枠組を越えて広げていったと思われる。例えば、「ガイアナ航海について」の冒頭で、彼は、ガイアナでの事業をこう位置づけている。

「第一に、偶像崇拜や無知、未開の状態から原住民の魂を、我慢できないスペイン人専制から原住民の肉体を、救うがゆえに栄誉あることであり、……第二に、女王の領土を拡大し、多くの物品で国を豊かにし、その他の地域へ「我が国の」勢力を伸長する糸口となるがゆえに有益なことであり、……第三に、我が国の安全のために必要なことであ

り、しかも、さほど重い負担も困難もなく達成される。」^⑩

この一節からは、ローリーが、ガイアナを、一時的な軍事上の拠点にとどまらず、イングランドの恒久的な植民地として考えていたことがわかるであろう。確かに、対スペイン戦略は、ガイアナ計画の要であり、その直接の動機でもあった。しかし、スペインとの公式上の平和が成立して以後、ローリーは、ガイアナ計画を貫く反スペイン感情を軍事戦略の側面だけでなく、先の引用にある第一、二番目の目的にも照応して、計画の内容をふくらませ、その重心を単なる軍事拠点以上の意味をもつ植民地建設へと移行していったのであり、また、そうする必要性に迫られたのである。では、ローリーの描く植民地ガイアナとはどのようなものであったのだろうか。次章では、この問題を検討することにした。

① ヘーリオ、並びに彼の配下、ドミンゴ・デ・ベラ・ヤルグエンのガイアナのスペイン領宣言への動機をいって、Quinn, *op. cit.*, pp. 167-70; Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 468-76 を参照せよ。

② *Ibid.*, vol. VIII, pp. 468-69.

③ Andrews, *op. cit.*, p. 294.

④ 一五九三年三月の議会で、「今や一五八八年以上にスペインの脅威が迫まらざる」と論じてローリーの発言をいって、G. B. Harrison, *An Elizabethan Journal, 1591-1603: being record of those things most talked of during the years*, (3 vols.), vol. 1, 1974, pp. 213-15 を参照せよ。

⑤ Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 388.

⑥ 一五九二年、ローリーは、スペイン銀船隊の封鎖を行なったため、フランス諸島へ遠征隊を送ったが、戦術上の効果をあげられず、結局、エリザベス朝最大の獲物、マーブル・キャニオン号の奪捕に留まった。しかも、その掠奪品の分配をめぐる争いで混乱を

目の当たりにしたローリーは、私掠活動の限界を悟ったと思われる。Quinn, *op. cit.*, pp. 175-76. また、一五九六年のカデイス遠征に対するローリーの批判を、Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 667-74 を参照せよ。

⑦ *Ibid.*, vol. VIII, p. 381.

⑧ *Ibid.*, vol. VIII, p. 382.

⑨ *Ibid.*, vol. VIII, pp. 382-83. また、ローリーは、スペイン・エニャや西インド諸島に関する論文も書いていたと思われるが、現存していない。

⑩ *Ibid.*, vol. VIII, p. 389.

⑪ 一五八六年、フランス諸島近辺でローリーの持ち船が私掠活動中に捕虜にしたガンボアから、ローリーは初めてガイアナに関する情報を得た。Quinn, *op. cit.*, pp. 165-66.

⑫ Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 398-406.

⑬ *Ibid.*, vol. VIII, p. 403-04.

⑭ *Ibid.*, vol. VIII, p. 500.

- ⑭ *Ibid.*, vol. VIII, pp. 463-64; Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', p. 137.
- ⑮ Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 464-66. この文章をローリーが西インド諸島と比較しながら述べている。
- ⑯ Richard Hakluyt (Intro. by J. Massfeld), *Principal Navigations* (8 vols.), 1907 (1967), vol. 7, pp. 358-400; *Ibid.*, vol. 8, pp. 1-13 を参照せよ。
- ⑰ Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 383.
- ⑱ J. H. キリオット (越智武臣・川北稔訳) 『新世界と旧世界』一四九二—一六五〇』岩波書店、一九七五年、一三〇頁。トリヂシリヤス条約 (一四九四) が依然として、スペイン、ポルトガル以外のヨーロッパ諸島の海上発展に対する大きな桎梏となっていたことは、スペインフランス間のカトー・カンブレジ条約 (一五五九) やヴェルサイユン条約 (一五九八) から明らかである。Andrews, *op. cit.*, pp. 135-66.
- ⑳ Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', p. 137.
- ㉑ さしづ、ローリーは「偉大なる支配者」Elizabeth castipuna aquerwana」の名を、オリノコ川沿りに住むガイアナ諸部族の間に広めることに成功したと述べている。Raleigh, *Works*, vol. VIII,

pp. 396, 500-03.

㉒ *Ibid.*, vol. VIII, pp. 438 ff.

㉓ *Ibid.*, vol. VIII, p. 438.

㉔ Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', pp. 148-53.

㉕ 当時、インドランドはスペインのフランシス・ポルトリーニョ地方への侵攻に対して、ヘセックス伯を総司令官とする遠征軍を派遣し (一五九一—一五九五)、次いで、第二、第三のスペイン無敵艦隊来襲 (一五九六、一五九七) に備えての防衛強化、さらにはアイルランドの反乱 (一五九八—一六〇一) に対する鎮圧軍を送り込んだため、戦費、人員不足に悩んでいた。例えば、W. B. Wernham, *The Making of Elizabethan Foreign Policy, 1558-1603*, 1980, pp. 71-93 を参照せよ。ローリーはこの現状を考慮して、原住民武装政策を提案したと思われる。

㉖ 特にシェイムズ一世時代の親スペイン外交については、Quinn & Ryan, *op. cit.*, pp. 154-78; G. M. トレヴェリアン (大野真吾監訳) 『イギリス史』(全三巻) 二、みすず書房、一九七四年、二二—二四頁等を参照せよ。なお、この期の宮廷内派閥抗争がローリーのガイアナ計画、ひいてはインドランドの海上発展に与えた影響も看過できないが、その分析は他日に譲りたい。

㉗ Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', pp. 135-36.

二 計画の展開

前章で論じたように、ローリーは、ガイアナ原住民諸部族に対し、執拗なまでに友好姿勢を強調していた。それが、スペインに対する戦略的配慮からとられた策であったことは、既に述べた通りであるが、植民という観点から見れば、それは、ローリーがいかに真剣にガイアナにおけるイングランドの支配を考えていたかを示しているといえるだろう。

実際、彼はガイアナ植民の第一の要を、原住民政策、すなわち、原住民の文明化に置いている。例えば、ローリーは、イタリヤの政治学者ジョバンニ・ポテーロの『都市の偉大と壮麗さの諸原因』から、原住民政策に触れた次の箇所を特に抜萃し、訳出している。

「野蛮で未開の人々、彼らの誤まった慣習を文明化し、改革する唯一の方法とは、第一に、彼らに情のこもった会話で受け容れられることである。すなわち、彼らの言葉を学んだ上で、彼らの生活様式には不便で、不都合なことが多々あることを知った上で、……原住民たちに、慎重に、そのことを理解させることである。」^①

ローリーは、これまで歴史上の大国や君主たちは原住民の町を余りにも性急に破壊し、原住民と入植者とを完全に分離して支配してきた^②、と非難するポテーロの同書の一部を特に選んで訳出する際、かつてラス・カサスが攻撃したコンキスタドールズの苛酷な原住民支配を念頭に置いていたと思われる。むしろ、この時代ともなれば、ラス・カサス、オビエード、アコスタらの著作の影響によって、スペインにおいても、原住民に関する理解が深まり、彼らに対する保護が叫ばれてはいた。しかしながら、ローリーは、こうしたスペイン国内の新しい考え方を自らの植民論にとり入れつつも、戦略構想と同じ論調で、一貫してスペインの原住民支配を「専制」とみなして攻撃し続け、それによってイングランド植民地建設を正当化している。ガイアナ計画の本質は、まさにここにある。ローリーにとって、殊さらに「黒い伝説」Black Legendを持ち出し、スペイン支配とは好対照をなす原住民の文明化をイングランドの植民方法として強調することは、計画の施行、意義付けのために不可欠であったといえるだろう。

それゆえに、「文明化」に対する解釈がスペイン人聖職者たちと異なるのは当然の帰結である。当時、「文明化」とは、何よりも原住民の魂の救済、すなわち、キリスト教への改宗を意味していた。オビエードしかり。ローリーの植民論に強い影響を与えたアコスタやハクルートも例外ではない。^③ところが、ローリーは、「神格化された何かを崇拜せずに、都市は存続しえない」^④ことを認めつつも、次のように考えている。

「必要とあらば、護衛付きで説教師を派遣することも当然なこと、そして慈悲深いことではあろうが、異教徒たちに神の福音という喜ばしき啓示を与えた場合に、彼らがそれを拒絶したとしても、そのことは、彼らの国を征服する戦いを起こす、十分な理由とはならない。」^⑤

それゆえに、ローリーは、キリスト教への改宗にとどまらず、裁判所の設置を含む法体系の整備、後述するイングリッド・ガイアナ間の交易促進と関連する港や道路、運河等々の建設など、様々な角度から、「キリスト教徒に優るとも劣らない、原住民にふさわしい文明の知識」^⑦を論じたのであった。

この原住民の文明化がローリーのガイアナ植民論の核となっているが、この政策によって平和裡に入植を完了した後は、彼に従えば、次の三点が植民地経営の柱となる。

- (一) 植民地産業の育成
- (二) 教育機関の設立
- (三) 本国―植民地間の交易促進

以下、各々について分析しながら、ローリーの描く植民地、ガイアナの青写真を検討していくことにしたい。

まず、(一)であるが、その中心は、職人の入植、並びに育成にある。^⑧既に、前章で論じた原住民武装化政策において、ローリーは、「我々の武器作りの職人が一人いれば、さほどの苦勞もなく二十人のガイアナ原住民に武器の作り方を教えることができよう」と述べていたが、同様の方法によって、彼は、植民地産品の加工をも植民地自体で行なうべきだと提案している。そして、この提案には、ローリー自身の経験に基づく実質的な裏付けが認められることに注意していただきたい。それは、イングリッドにとって最初の植民地、アイルランドで、第一回ガイアナ遠征準備とほぼ並行して（一五九三―九五）行なわれた、木材輸出、及び、製鉄所設立事業である。^⑩この事業によって、「約二百名のイングリッド人に職を与えることに成功した」ローリーは、アイルランド人よりずっとイングリッドに対して従順で、しかも、アイルランド以上に

木材資源にも、金・銀・銅等の地下資源や、染色用の草木、良質の木綿、絹、様々な種類の樹脂等々の熱帯産品にも恵まれたガイアナに、イングラントの技術を移植し産業を興そうと考えたのであった。^⑧

(二)は、原住民の文明化とは別に、入植者の教育に触れた提案である。ローリーは、次のように書いている。

「学者たちに便宜が図られる諸特権を有するアカデミーや学校の設立、すなわち、創造と喜びのための方策は、植民地の町を豊かにする上で非常に重要なものである。なぜならば、人は、名誉と富とにあこがれるものだからである。

そして、自由学芸 Liberal sciencesこそ、人に富をもたらし、名誉ある職務にある人に昇進と上昇とを与えるのだ。」^⑨

この一節は、単に植民地における教育の重要性を謳ったものではない。それは、『ガイアナ帝国の発見』の次の一文と呼応して、国内の失業者、特にジェントルマンの次・三男に入植を奨励する、という具体的な目的のために設けられたと解すことができる。

「この「ガイアナでの」事業において、軍人やジェントルマンの次・三男、職を求める船長や船乗りたち全てを雇用することができ。」^⑩

すなわち、ローリーは、ガイアナへの入植を希望するジェントルマンの次・三男の名誉欲をも満たすために、本国と同様、職人の育成や原住民の教化とは一線を画するジェントルマンの教養、人文主義教育を授ける場を準備しようとしたのであった。

(三)は、「最初の食料調達や武装にしか負担がかからない」というガイアナ植民の利点を生かし、植民地を恒久的に保持するために、また、何よりも、イングラントが抱える深刻な不況、失業者問題を解決するために、ローリーが最も力点を置いて論じている問題である。特に、後者に関して、彼は、独立後急速に経済成長、海上発展を遂げつつあるオランダと比較しながら、イングラント経済の現状と、発展の桎梏となっているものは何かを、次のように分析している。

「第一に利益を上げにくい商取引の方法、第二に国産品を仕上げ、加工する技術の欠如、第三に我が国の通貨の」^⑪

「ローッパ市場における」過小評価、以上の三点が根本的な問題である。」^{①⑦}

この理解に立って、彼は、以上の三点を改善し、イングランドが経済発展を遂げるためには、「海の支配者となり、全ての通商、海運を掌中に収める」^{①⑧}以外に方策はない、と断言し、同時に、植民地建設の重要性を主張するのであった。

既に触れたように、ガイアナは、地下資源や木材資源、真珠、トパーズ等の貴金屬、胡椒、生姜、砂糖、バルサム（香料に使われる含油樹脂）、そして、商品としての価値が高い西インド煙草 *Nicotiana tabacum* ^{①⑨} 等々に恵まれた地である。ローリーは、ガイアナとの恒常的な交易を通じて、国内の失業者に雇用の場合を、沈滞した経済に活気を、与えることができると確信したのであり、それは、すでに『ガイアナ帝国の発見』の中にも次のようにはっきりと記されている。

「疑いもなく、一、二年も過ぎれば、現在西インド貿易を管理しているセビリーヤ以上に、ガイアナとの交易で活況を呈する商務院を、ロンドンで、見るようになるう。」^{②①}

以上の分析から、ローリーの構想するガイアナ植民とは、次のように捉えることができよう。すなわち、それは、より多くのイングランド人を入植させることで新しいイングランド社会の建設を意図したものであるというよりも、むしろ、「文明化」を通じて様々な角度から原住民をイングランドに吸収し、彼らの協力、労働力に発展の多くを依拠しつつ、プランテーションよりも交易を重視した植民地^{②②}であった。特に、植民地との交易の重視が、単に経済上の必要性からだけではなく、本国―植民地間の通商路確保のための海軍力強化を含む、イングランドの海上力、制海権獲得の観点から論及されている^{②③}点に留意していただきたい。ローリーは、獄中の彼を師と仰いで敬愛し、彼の計画に惜しみない援助を与えたヘンリー皇太子に献じた「船、錨、羅針盤の発明」の中で、次のように書いている。

「海を征する者は交易を征し、世界の富を、そして、世界そのものを征覇する。」^{②④}

この短い一文に凝縮された彼の主張、並びに前章で分析した戦略論とを考え合わせるならば、ガイアナ計画とは、軍事、非軍事の両面から、スペイン帝国の打倒とそれに代わるイングランド帝国の建設とを目ざす、まさしく「大計画」Grand

scheme であつたと見えるだらう。

- ① Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 541.
- ② *Ibid.*, pp. 541-43. ロリーがホチーロの翻訳を行つたのは、一六〇三年以降のロンドン拵投獄時代なと思われるが、C・ヒルも指摘するやうに、大陸の進んだ思想をイングリランドへ伝える際にロリーが果たした役割や、彼の手がけたいくつかの翻訳の正確な年、など、今後ロリーの著作集に対するさらに厳密な資料批判が必要かと思われる。C・ヒル（福田良十訳）『イギリス革命の思想的先駆者たち』岩波書店、一九七〇年、三六四頁。
- ③ 例えば、ヒルオット、前掲訳書、七五一-八六頁、ホセ・デ・ブロス（増田義郎訳）『新大陸自然文化史』上・下、大航海時代叢書第一期第三、四巻、岩波書店、一九六六年、Richard Hakluyt (Intro and notes by E. G. R. Taylor), 'Discourse of Western Planting', 1584, in *The Original Writings & Correspondence of the Two Richard Hakluyts*, vol. 2, Hakluyt Society, 2nd. series, No. LXXXVII, pp. 214-18 等を参照せよ。
- ④ Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 544-45.
- ⑤ Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', p. 143.
- ⑥ Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 544-47.
- ⑦ Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', pp. 148-49.
- ⑧ Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 543-45.
- ⑨ Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', p. 150.
- ⑩ アイルランド南部マンスター地方の自分の所領に程近いブラックウォーター川付近の豊かな森林資源に着目したロリーは、それを本國を始め、木材不足に悩むスペイン領カナリー、マデイラ両諸島やフランスのポルドー、ラ・ロシェル等々の地域へ輸出する事業を興した。
- ⑪ また、キリン、その木材を燃料として活用して、コンウォールに製鉄工場を設立し、産業育成に貢献している。一五九八年のアイルランド反乱兵へ継続されたロリーの事業については、Lacey, *op. cit.*, pp. 190-93; D. B. Quinn, *op. cit.*, pp. 144-61 を参照せよ。
- ⑫ Lacey, *op. cit.*, pp. 191-92. ロリーの産業育成政策については、ヒルズマス朝最後の議會（一六〇一）における彼の發言を合わせて参照されたい。この議會で、農耕奨励のための法案廃止を支持し、農業以上にエニッチファクチャー育成を重視するロリーは、農業を國の基本と考えるロバー・キーンと激しく対立している。N. L. Williams, *Sir Walter Raleigh*, 1962, pp. 156-61.
- ⑬ Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 463.
- ⑭ ロル、前掲訳書、二六九-七〇頁、同様の指摘が見られる。
- ⑮ Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 544.
- ⑯ *Ibid.*, vol. VIII, p. 466. ロルが明らかならうに、『ガイアナ帝國の発見』を著わした時点では、ロリーは、ガイアナに多数の軍人を派遣しようと考えていた。しかし、同書公刊（一五九六）後のイングリランドの状況から、彼は次第に、前章で述べた原住民武装策へと構想を変更したと思われる。本論考、第一章、注⑩参照。
- ⑰ *Ibid.*, vol. VIII, p. 466. 同様の主張は、Raleigh, 'Of the Voyage for Guiana', p. 137 にも見られる。それがガイアナ植民推進の大きな利点であった。
- ⑱ Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 355-76. ロリーは、穀物、醸造酒、塩、木材等々の細かな品目ごとに、いかにイングリランドの交易がオランダの仲介貿易によって阻害されているかを、さらには、羊毛工業、漁業に関する問題、國際市場における通貨問題までも、詳

しく分析してゐる。

⑮ *Ibid.*, vol. VIII, p. 374.

⑯ *Ibid.*, vol. VIII, p. 463. フロリダから北米にかけて生育していた煙草 *Nicotiana rustica* と比べて、西インド諸島からガイアナにかけての地域にのみ生育していたこの種の煙草は、一六世紀末から一七世紀初頭、ヨーロッパ諸國の商人たちが争って求めた種類のものである。この種の煙草がヴァージニアに伝わる一六一〇年代後半まで、イングランドの輸入煙草の供給地は、主としてガイアナであったと思われ。 *Acts of the Privy Council of England, colonial series*, vol. I, 1613-1680, 1908 (1966) の一六二二—一六三三年を参照せよ。 (以下 A. P. C. を略す)。

⑰ Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 466.

⑱ ローリーはガイアナでのプランテーションについては全く言及して

三 計画の遺産

計画の存在とその実行とはいつの時代にも自ら別問題である。ローリーのガイアナ計画も例外ではなかった。ガイアナ計画は、ハクルートの『西方植民論』と同様、対スペイン戦を最後まで躊躇した女王や、目先の掠奪の利得に翻弄される廷臣や軍人たちには、ヒュームのいうように「見掛け倒しの嘘」にしか映らず、真面目にとりあげられることもなかった。確かに、現在の地理から見れば、ガイアナを拠点とすれば険しいガイアナ高地を抜けてスペニッシュ・メインを「背後から」しかも容易に攻撃できると考えたローリーの戦略論は、現実には無理な構想であったといえよう。当時の地理上の知識、感覚を考えるならば、^①ローリーの誤解もやむをえないことではあったろうが、それが、彼の計画の一つの限界であったことは否定できない。また、計画の展開、すなわちガイアナで本格的な植民活動を開始しようとする時期に、新イン

がない。彼の計画があくまで交易、もしくは植民地や本國の産業育成にあったことは、本論考の「はじめに」の注⑮の諸論文や一五九三—九七、一六〇一年の議会発言からも明らかである。そして、この点が、次章で述べるロバート・ハーコートやロジャー・ノースらのガイアナ植民との最大の相違でもあった。

⑳ この点を、ローリーは、本國—植民地間の交易活発化のための諸制度確立や、彼がステイト・マーチャント *state-merchant* と呼ぶ商人育成と関連付けて論じているが、その詳細は他日に譲りたい。 *Ibid.*, vol. VIII, pp. 374-76, 546 を参照せよ。

㉑ *Ibid.*, vol. VIII, p. 325.

㉒ これは、一五九〇年代に活躍し始める若者たち——エズラーは一五六〇年世代と呼ぶ——の野心的計画を目にしたヴェニスンの外交官の言葉である。 Esler, *op. cit.*, p. 729.

ランド王ジェイムズ一世によってローリーが投獄されたことは、計画とその実行の落差を決定づける出来事であり、実際、一三年間に及ぶ投獄中の国内外の情勢の変化により、結果として、第二回ガイアナ遠征も失敗に終わっている。そしてそれが、一六一八年、ローリーを断頭台へ送る直接因となったことは、紛れもない事実である。

それゆえに、従来、なぜガイアナでの構想が実現不可能であったのか、という問いは、なぜローリーは実現不可能なことをやろうとしたのか、という問いに転化され、ここに研究者たちの関心が集中してきたことは、本論考の冒頭で述べた通説からも明らかであろう。しかしながら、筆者は、なぜガイアナ計画が実現不可能であったのか、という本来の問題にこだわろうと思う。なぜなら、ガイアナ「計画」という視点から考えるならば、失敗の本質は、一つには、計画自体の限界と関わるものであろうし、また一つには、計画が対スペイン戦略を基点としている以上、その破綻は、イングランド—スペイン関係の変化、そして、広く、国際情勢の動向の中で検討する必要があると思われるからである。さらに、ローリーの第一回遠征以後、ガイアナは、スペインだけでなく、オランダ、フランスとの競争の場となったこと、その背景には、ラテン語、オランダ語、ドイツ語、フランス語に翻訳された『ガイアナ帝国の発見』の影響があったという事実^③、も忘れてはならないだろう。

そこで、本章では、本論考の冒頭であげた三番目の通説批判と関連する、一七世紀初頭のイングランドのガイアナ植民の実行過程を追いながら、その中で明らかとなるローリーのガイアナ計画の限界、失敗の本質を分析するとともに、彼の残した遺産、すなわちガイアナ計画の意義とは何だったのか、を考えていきたい。

既に述べたように、ガイアナ計画は、ローリーの、そしてイングランドの反スペイン意識の上に立てられたものであった。そして、それは、計画の継続のための大前提でもあった。それゆえに、ロンドン塔に投獄された後、ペンを武器として精力的な執筆活動を展開したローリーの矛先は、まず、一六〇四年に結ばれたスペインとの平和条約否定へと向けられている。ローリーは次のように書いている。

「近年、スペイン帝国は激しく動揺し、崩壊寸前にある。哲学の法則曰く、『わずかな部分の瓦解は全体の崩壊の前兆である』……スペイン王は、急遽、イングランドとの和平を成立させることにより、ヨーロッパ、及び、西インドにおける勢力低下の速度を落とし、……かつての地位への回復を図ろうとした」^④が、

「フェルナンド以来の外交政策から推測すれば……スペイン王はこの和平が自国の利益にならないと知れば、約束も誓いも簡単に破棄するに違いない」^⑤。

ここには、スペインの国力もまた、国際環境条件の複合体であるという認識が明らかであろう。この理解に基づき、ローリーは、スペインとの平和の大義を真向から否定し、王に次のような選択を迫るのであった。

「イングランドにとって、『スペインとの』戦争への道と平和への道と、どちらが安全であろうか」^⑥。

この信念に従って、彼は獄中からでき得る限りの援助をガイアナ植民を志す者たちに与え続け、計画の実現を図ろうとしている。では、彼の計画はどのように継承されていったのか。この点をガイアナ植民史を概観しながら考えていきたい。

イングランドのガイアナ植民史は、一六〇四年、ガイアナ高地から流れ出るウィアポコ〔オヤバケ〕川沿いに入植したチャールズ・リーに始まる。リーは、ヘンリー皇太子を通じて知ったローリーにガイアナ入植方法を学び、原住民の労働力により、亜麻、木綿、煙草、砂糖きび等の栽培を試みたが、疫病や本国からの物資の供給が途断えたため、二年ほどで破綻した^⑦。

次いで、一六〇八—〇九年、ロバート・ハーコートが、同じくヘンリー皇太子の後楯を受けて、エセキボ川とアマゾン川の間に入植を行なった^⑧。ハーコートは、ローリーから入植に際しての細かな助言を受け、また、プランテーションを急いだリーの失敗に鑑みて、まず、イングランド—ガイアナ間の通商関係確立に主眼を置いている^⑨。そして、帰国後、一六一三年、ガイアナ植民の特許状更新と呼応して著わした『ガイアナ航海について』の中で、ハーコートは具体的な品目を掲げてガイアナの商業的価値を鋭く追求し、植民の必要性を強調したのであった^⑩。

さらにもう一点、ハーコートがガイアナ植民に与えたローリーの影響に関しては、彼の著作から次の一節を引用しておかねばならないだろう。

「まず、私は、原住民たちに、故エリザベス女王陛下下の時代にここ「ガイアナ」で行なったサー・ウォルター・ローリーの探検を想い出させた。……彼ら「原住民」は、ローリーの行なったことをはつきりと覚えており、こう言った。サー・ウォルター・ローリーが再び来ると約束してから、長い年月が過ぎた、と。そこで、私は、次のように弁明した。ローリーは帰国（一五九五年）後、多忙な公務に追われてここへ来ることは叶わなかったが、ローリーが送り出したケイミスらは、彼にこの地の情報を確実に伝えていた。その後、エリザベス女王が崩御され、彼女の後を継いだジェイムズ一世陛下も国事に忙殺されていたため、久しく約束を果たせなかったが、……今ようやく、王は私を遣わすことができるようになった、と。……そしてその後で、私は彼らに再び約束した。原住民たちを彼らの敵から守る、と。この私の説明を聞いて、原住民たちは、私が来たことを非常に喜んだのであった。」^⑩

こうして、ハーコートは、植民地の存続に不可欠な食料供給を原住民に依存することにも、ローリーが築いた同盟関係を継続することにも成功し、平和裡に、通商の拠点を設立することができた、と記している。原住民がどの程度、ハーコートの説明を理解したかには疑問が残るが、彼に同行した二人のガイアナ諸部族の長、アントニー・カナブルとレオナルド・ラゴバ——共に第一回遠征からの帰国に際して、ローリーがイングランドへ連れていき、彼と共に暮らしていた——の協力を考え合わせるならば、原住民にローリーのガイアナ遠征を強調したという先のハーコートの記述も、単なる誇張とはいえないだろう。一七世紀初頭、ガイアナや西インド諸島に入植を試みたオランダ、フランスの植民団の多くが、原住民の抵抗によって崩壊の危機に曝されたり、事実、破綻していった中で、例外的に、イングランドのガイアナ植民がこの危険性から免がれたのは、まさに、ローリーが入植の要として強調した対原住民同盟政策によるものと考えられる。^⑪以後、ハーコートは、イングランドに対する原住民の恭順、ガイアナの健康的な気候、豊かな熱帯産品、の三点を根拠に、ロー

リーと同様、「神の栄光と国王の名誉、そしてイングランドの繁栄」のために、一貫してガイアナ植民を推進し、ガイアナ会社の設立（一六二六）に至っている。

加えて、もう一人、ハーコートとは別の角度からローリーのガイアナ計画を継承した人物として、一六〇九—一〇年に入植を試みたトマス・ロウの名を挙げることができよう。とりわけ、彼の植民には、親スペイン外交を旨とする宮廷にあって、ヘンリー皇太子と同様、反スペイン外交政策を遂行しようとする秘書長官——エリザベス女王時代、ローリーのライバルであり、今やソールズベリ伯となった——ロバート・セシルの意向が強く反映されていたことに注意していただきたい。セシルは、対スペイン政策の一環として、ジェイムズ一世の禁令を無視して西インドで交易活動を続けていたイングリッド船に対するスペインの干渉、攻撃を中止させ、西インドにおけるイングランドの立場を改善するために、ローリーのガイアナ計画の貢献を期待したのであった。すなわち、ハーコートがローリーの計画にある交易促進論に植民の重心を置いたのに対し、ロウはその戦略的側面を重視し、継承したと捉えることができよう。

以上、ローリーの第二回遠征に先立つガイアナ植民の経過を、彼の計画がどのように継承されたかに焦点を当てて概観してきた。ハーコートの記述からも明らかのように、ガイアナ計画の最大の遺産は、植民に際して最も慎重さが要求される対原住民政策に見られた。そして、ローリーがそれを植民の中心に据えたことによって、ガイアナを含む西インドは、金、銀の掠奪の場ではなく、入植の場であることがはっきりと示されたのである。ここにも、アイルランド、北米に次ぐ第三の辺境として、ガイアナをイングリッド「帝国」の枠内に組込もうとするローリーの大きな視野を見ることができよう。ハーコートや彼と共にガイアナ会社設立に尽力したロジャー・ノースら^⑩がどの程度、この視野を理解していたかは今後さらに検討を要する問題ではあるが、少なくとも、彼らは、ガイアナが西インドにおけるイングランドの植民活動の第一段階であることを、ローリーの計画から直接学んだと考えてよいだろう。

しかしながら、同時に、ガイアナ計画自体の問題や限界も彼らの植民過程の中で顕在化してくるのであり、それは、彼

ら、計画の実行者らがローリーの計画に加えざるをえなかった次のような修正、変更の中に、最も歴然たる形で現われていると思われる。

その一つは、入植地に関する問題である。ローリーは、スペイン人入植地への侵入に有利と考えた、オリノコ川とその支流、カロニ川が接する付近を、第一の入植地として計画を練り上げていた。ところが、実際の入植地は、ハーコートの場合にはエセキボ川とアマゾン川の間、ロウの場合にはウィアポコ川とアマゾン川の間というように、ローリーの計画よりかなり南下しているのである。これは、平和条約締結後のスペインに對する配慮、すなわち、イングランド側の譲歩の結果と思われるが、対スペイン戦略に主眼を置く彼の計画にとって、それは後退に他ならない。しかし、イングランドが、公式の親スペイン外交をとりつつも西インドへの発展を進めるため^⑦には、可能な限りカリブ海域にあるスペイン人入植地との衝突を回避できるように入植地を南へ移す必要があった。事実、この入植地の移動により、北米と同様、ガイアナでは、対スペイン戦終結後、いち早く植民活動が開始されたのであり、また、一七世紀初頭、ガイアナは北米に次ぐ最も有力な、実現の可能性の高い植民の候補地^⑧と考えられたのである。すなわち、植民論として見た場合、対スペイン戦というエリザベス朝末期の特殊事情に強く拘束されたローリーのガイアナ計画には、新しい状況、植民活動が本格化する平和の中で実行に移すための柔軟性に欠けていたことを、一つの限界としてあげることができよう。

第二に、先の入植地の移動とも関連する計画の限界を、原住民との関係の中に認めることができる。既に述べたように、ローリーの計画は、原住民の協力、特に彼らの戦力、労働力に多くを依拠していた。しかし、ガイアナ植民の実行過程で対スペイン戦略の意味合いが希薄化すること^⑨につれて、スペイン人への敵意に共通点を見出し出てきた原住民諸部族との連合の必要性もまた薄れ、その結果、ハーコートの『ガイアナ航海について』の改訂版(一六二六)^⑩にあるように、対原住民政策にも修正の手が加えられ、入植者の経済的利害と対立する部族は切り捨てられていくことになるのである。確かに、原住民を軍事、経済、文化の各側面からイングランド「帝国」に吸収しようとするローリーの構想は、当時のイングランド

の軍事力、海上力の現状、並びにガイアナの現実を十分に考慮に入れた植民計画ではあった。しかし、それは、状況如何によつては、また、計画の遂行者が原住民に信望の厚いローリーその人でない限り、植民活動の手枷足枷ともなり得ない可能性を当初より孕んでいたのである。

さらに、友好、協力関係を基盤とする対原住民政策の危機は、彼らの労働力を頼みとする通商、植民方法の破綻にも波及することにならう。特に、ローリーが、技術の移植によるガイアナでの産業育成を論じながら、そこでの農業、すなわちガイアナにおける熱帯産品のプランテーションには全く言及していないことは、植民地の経済発展から見れば、最大の欠陥であり、限界であったといえる。それゆえに、ガイアナ会社設立に際して、ハーコートやノースらが、入植の重心を、ローリーが強調した交易ではなく、より多くのイングランド人の入植を奨励、必要とする砂糖きびプランテーションへと移したのも、植民地の果たす経済的役割を考えれば当然の帰結であろう。むろん、彼らがプランテーションの労働力をどのように確保しようとしていたかは、今後の検討に委ねなければならない。

しかし、こうした計画自体に見られる限界にもまして、ガイアナ計画をその本質において失敗へと追い込んだものは、一七世紀初頭の国際情勢の変化、すなわち、反スペインから親スペインへの公式外交の轉換にあったといえる。一六一二年、ローリーの計画を終始後楯してきたヘンリー皇太子と対スペイン強硬派のセシルの相次ぐ死去、翌一三年、ジェームズ一世を意のままに操り、親スペイン外交政策の強化を図る駐英スペイン大使ゴンドマール伯の着任と同大使によるガイアナ植民活動への圧力——この状況下で、ローリーは、金鉱発見か、さもなければ処刑という最後通牒をつぎつけられたのであった^②。この意味で、一六一七年の第二回遠征は、まさしく賭けであった。

ローリーは、第二回遠征過程で、彼の入植目的地付近に築かれたスペインの要塞、サン・トメの町に火を放った。それにより、ローリーは、スペインとの平和を侵害した罪が付加され、帰国直後、再逮捕された^②。この「失敗」によつて、一七世紀中葉、市民革命の熱っぽい雰囲気と相まって、ステュアート専制とスペインに果敢に挑み、散った英雄、殉死者と

いうローリー像が定着していくことになるが、それと共に、一五九〇年代以来彼が育くみ続けたガイアナ計画は、彼の処刑以後、再燃する反スペイン感情の中で、スペインから黄金の奪取を図った冒険とみなされ、北米、西インド諸島植民活動とは一線を画するイギリス航海史上の余話と解されるようになっていくのである。

一六一八年、ロンドン塔の一室で処刑を待つローリーは、この運命の遠征を次のように回想している。

「平和のない所で平和を破ろうとしても、できるはずもないだろう。」

オールド・パレス・ヤードにて、「最後のエリザベス朝人」サー・ウォルター・ローリーの運命がつかしたのは、一六一八年一月七日のことであった。

① 例えば、L. A. Brown, *The Story of Maps*, 1979, pp. 113-79. また A. Sinclair, *Sir Walter Raleigh and the Age of Discovery*, 1984, p. 61 のガイアナの地図(一五九九)を参照せよ。

② 一五九五年九月の帰国以後、ローリーが行なったガイアナとの接触の状況、一六〇三—一六〇六年の投獄時代を経て、一六一七年夏の第二回遠征に至る事案経過については、Quinn, *op. cit.*, pp. 196-268; *Lacey, op. cit.*, pp. 237 ff. 等を参照せよ。

③ 一五九七年の Cabelian に始まるオランダのガイアナ植民、一六〇四年以降のフランスのガイアナ植民、及び、この二国の植民活動を支えた Jodocus Hondius のガイアナの地図作成については、例を Robert Harcourt (ed. by C. A. Harris) *A Relation of a Voyage to Guiana*, (1613), Hakluyt Society, 2nd ser. No. LX, 1828, pp. 1-6, 43-48 を参照せよ。一七世紀を通じてガイアナの地図の基となるホンディウスの地図は、『ガイアナ帝国の発見』におけるガイアナの地理の描写を具現化したものである。

④ Raleigh, *Works*, vol. VIII, pp. 309-10. 「スペインとの戦争とネ

ーデルマンズの擁護について」と題するこの論文は、スペインとの平和条約締結後、一—二年のうちに書かれたと思われる。

⑤ *Ibid.*, vol. VIII, pp. 307-08. こうしたスペインとの平和条約に対するローリーの不信は、エリザベス朝末期以来の西インドでの私掠活動を通じて次第に明らかとなったスペイン帝国の財政危機に基いてこそ。詳しくは J. H. Elliott, 'Self-perception and decline in early seventeenth-century Spain', *Past & Present*, 74, 1977, pp. 41-61; J. H. Elliott (藤田一成訳) 『スペイン帝国の興亡』、一四六九—一七二六、岩波書店、一九八二年、三二七—三二二頁等を参照せよ。

⑥ Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 310.

⑦ 一〇〇植民については Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes*, (4 vol. 1625): 20 vols., 1905-07, vol. XVI, chap. XII, "Captain Charles Leigh his voyage to Guiana and plantation there" を参照せよ。なお、オヤムケ川は、現仏領ガイアナとブラジルの国境を流れる川である。

- ⑧ ハーコートは、今アメリカと呼ばれる地は、北ウォールズ王 Owen の長男の Madoc が発見、征服した(一一七〇)というウォールズ伝説に、ハンリー皇太子に植民の特許状を求める正当な口実を見出した。そして、一六二二年のハンリーの死後は、彼に代わって皇太子となったチャールズ(後のチャールズ一世)に後楯を頼み、彼の著作『ガイアナ航海記』(一六二三)もチャールズ皇太子に献呈されている。Harcourt, *op. cit.*, pp. 51-52. なお、モセキボ川は、現在のガイアナとスリナムの国境を流れる川である。
- ⑨ ハーコートは、オヤムケ川近くのカリボ国を拠点に、北はモセキボ川から南はアマゾン川まで通商のための良港を求めて探検した。そして、カインスマに港を定めたが、それは一五九六年、ローリーが派遣したケイミスがボート・ハワードと名づけ、ローリーが通商港として適すると認めた所であった。Ibid., pp. 78-86.
- ⑩ 原住民との具体的な交易品については、Ibid., pp. 98-106 を参照されたい。彼の列挙した交易品の多くは、すでにローリーやケイミス、メイナムらが注目していたものであるが、一七世紀初頭、一五九五年以来ガイアナに残っていたフランス・スバリー(あるいはスバローと記している書もある)が帰国し、ガイアナの熱帯産品をより詳細に報告したことにより、商人や冒険家たちのガイアナに対する関心が高まったと思われる。Quinn, *op. cit.*, pp. 194, 241. また、ハーコートは、とりわけ砂糖きびとその栽培法に関心を示しており、次第に、植民の重心も、砂糖きびプランテーションへと移していくことになつた。Harcourt, *op. cit.*, pp. 99-100, 153-54.
- ⑪ Ibid., pp. 73-76. ローリーの第一回遠征に対するハーコートの記述からは、彼がローリーのガイアナ遠征を、対スメイン戦略の一環として考えていることが明らかである。
- ⑫ ローリーを敬愛し、イングラランドを愛するこの二人のガイアナ原住民と彼らの真敵、またローリーとの関係については、Ibid., pp. 77-89 を参照されたい。
- ⑬ ed. by V. T. Harlow, *Colonising Expeditions to the West Indies and Guiana, 1623-1667*, Hakluyt Society, 2nd ser. No. LVI, 1924, pp. 140-41.
- ⑭ Harcourt, *op. cit.*, pp. 127-31.
- ⑮ ハンリー皇太子と植民については、Harlow, *op. cit.*, pp. xix-xxi; Quinn, *op. cit.*, pp. 245-48 を参照されたい。また、ヤンク卿の報告は、*Calendar of State Papers, colonial series, 1574-1600*, 1860 (1964), p. 11 (以下、C. S. P. と略す) を参照されたい。
- ⑯ ノースは、ローリーの第二回ガイアナ遠征に参加し、この時の経験やローリーとの接触から、ガイアナ植民の着想を得たと思われる。また、彼は、ガイアナ計画に関してローリーの右腕であったケイミスの縁者でもある。彼は、ローリー処刑の翌年、オヤムケ川からアマゾン川にかけての植民特許状を申請し、翌一六二〇年、入植を行なった。ノースの植民、ハーコートとの対立、並びに和解とガイアナ会社設立については、Harlow (ed.), *op. cit.*, pp. lxxv-lxxxii を参照されたい。
- ⑰ 一六〇四年の平和条約にも、カトー・カンブレジ、ヴェルヴァン両条約同様、新大陸領有権についての規定はなかった。ゴッド、シムズ一世は、スメインとの平和を損わないという条件付きではあるが、植民活動を奨励する口実を見出したのであった。Quinn & Ryan, *op. cit.*, pp. 152-55.
- ⑱ 例えば、一六一三―一六三三年までの枢密院に寄せられた植民関係の諸願、報告からは、同時期に植民特許状が与えられたニューファウンドランドやバーミンヘム諸島以上に、ガイアナに対する関心が高かったことがわかる。A. P. C., pp. 3-65. また、C. S. P., pp. 5-27 (1604-

21) の記録から、同様のことがいえる。

⑮ ハーロートの原住民政務の変化については、Harcourt, *op. cit.*, p. 85 (161.3) と pp. 147-48 (162.6) を比較、参照していただきたい。

⑯ Harcourt, *Ibid.*, pp. 153-59 の改訂版の修正を参照された。しかし、ハーロートは、この改訂された論文の中では、原住民に代わるプランテーションの労働力確保の問題を十分に論じてはゐない。

⑰ ユンドマール伯は、皮肉にも、ローリーがガイアナに着目する契機となったエル・ドラードの伝説を彼に教えたサルミニントの甥であり、叔父を捕虜にしたローリーを個人的にも憎んでいた。同大使は、ジェームズ一世から得たローリーの第二回遠征の詳細な情報を、本國へ書き送り、遠征を失敗に終わらせ、ついにローリーを処刑に追込んだ。A. P. C., pp. 19-21; Lacey, *op. cit.*, pp. 344-63; Quinn, *op. cit.*, pp. 248-64。ローリー自身、ユンドマール伯の囚通を十分に承知した上で、遠征に出たと思われる。Raleigh, *Works*, vol. VIII,

pp. 634-35.

⑱ 第三回遠征、並びに処刑に際して著述しているのは、*Ibid.*, vol. VIII, pp. 479-507; Raleigh, 'Sir Walter Raleigh's Journal of His Second Voyage to Guiana' in *The Discovery of the Large, Rich and Beautiful Empire of Guiana* (ed. by R. H. Schomburgk) Hakluyt Society, 1st ser., NO. II, 1848, pp. 177-208; Williams, *op. cit.*, pp. 257-64 等を参照された。

⑳ ローリーの処刑以後の彼に対する評価については、例えば、ヒル、前掲訳書、三三二―三三三頁、H. R. Trevor-Roper, 'The Last Elizabethan: Sir Walter Raleigh', *Historical Essays*, 1957, pp. 103-07 を参照された。

㉑ Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 501.

㉒ Trevor-Roper, *op. cit.* の標題参照。

おわりに

ローリーのガイアナ計画は、エリザベス朝末期の対スペイン戦という現実に対処するための軍事戦略構想であるとともに、イングランドが抱える経済問題の解決を図ろうとした植民論でもあった。そして、彼の計画は、当時のイングランドの現状や、イングランドとは気候も風土も異なるガイアナの現実を考慮に入れた、原住民諸部族との同盟を強調した点に、その独自性を認めることができる。しかもそれは、長期の展望に立って多面的に、軍事、非軍事の両面から、イングランドの海上発展を捉えようとする姿勢に貫かれていた。

しかしながら、第三章で分析したように、植民論として考えると、ガイアナ計画は、対スペイン戦という特殊事情に縛られ続け、親スペイン公式外交を旨とするジェームズ一世の下では、北米植民の再興ほど、宮廷人や商人たちの強い関心、

支持を得ることはできなかった。また、ガイアナでの植民活動の多くを原住民の協力に依存する彼の計画は、既に述べたように、実行者がローリーその人でない限り、破綻する可能性を絶えず孕んでいたのである。

こうした意味から、ガイアナ計画は、エリザベス朝末期という時代の産物であり、そして、あくまでも、「最後のエリザベス朝人」サー・ウォルター・ローリーの計画であったと捉えることができよう。

しかしながら、ローリーの計画の最大の遺産は、既述のごとく、それまで金、銀の掠奪の対象でしかなかった西インドを、イングランド人の新しい入植の地として捉え直した点にある。では、ガイアナ植民自体には、イングランドの西インド植民史の中でどのような意義を認めることができるのだろうか。

エリック・ウィリアムズは、それについて、次のように述べている。

「イギリスを含むヨーロッパ諸国は、ここに「第二回ガイアナ遠征の失敗による一六一八年のローリーの処刑」至ってカリブ海域への恒久的植民活動にその目標を転じたのである。」^①

すなわち、ウィリアムズは、ローリーのガイアナでの構想を、あくまでも黄金発見という形でのスペインに対する掠奪行為と捉え、彼の処刑の年、一六一八年をもって、イングランドの関心は西インド諸島に移り、ガイアナは放棄された、と考えているのである。換言するならば、ウィリアムズは、最後のコンキスタドールズ、ローリーの退場により、西インド諸島へと場を移して「入植」が始まると捉え、ローリーが深く関与していたそれ以前の、あるいはその後も引き続き行なわれたガイアナ「植民」そのものを全く評価していないのである。しかしながら、既に述べたように、植民活動が依然として暗中模索の状態にあった一七世紀初頭、ガイアナは、いくつかの選択肢の中で、北米に次ぐ「植民」のための有力な候補地とみなされていた^②。この事実も、一六三〇年代以降、次第に顕在化する対照的な結果——ガイアナ植民の停滞と西インド諸島植民の発展——とは別の文脈において、検討しなければならないだろう。なぜならば、ガイアナ植民の行詰りは、ローリーの処刑によってではなく、ガイアナ会社設立以後、一六二七—三一年の間に、西インド諸島植民との競合

の中で、生じたことだからである。^⑤そして、その原因は、リチャード・ソーントン師が『幸運な難破、この短い経験により回復された先に志ざし航海の損失』(二六二九)^⑥の中で批判した、ガイアナ会社自体の組織上の、または植民方針に見られる問題に帰すべきものだからである。本論考ではその詳細を考察する余地はないが、ローリーのガイアナ計画、そして一七世紀初頭におけるガイアナ植民の意義を考えるために、西インド諸島植民とのつながりにおいて、次の二点を指摘しておきたい。

第一に、西インド諸島における植民活動がまさしく、ガイアナ植民の副産物であったことである。すなわち、通常、西インド諸島植民の始まりとされるセント・キッツ(サン・クリストフ)島の入植(二六二三)は、ノースのガイアナ植民(二六二〇)に参加したトマス・ウォーナーが、その時の経験に基づいて着手したのであり、続くバルバドス島の植民(二六二七)も、出身地オランダのガイアナ植民に手がかかりを得たウイリアム・コーティーンの提案により、ヘンリー・ポウエルが、エセキボ川沿いのオランダ人入植者の協力を得て、行なったのであった。^⑧すなわち、西インド諸島での植民活動は、ガイアナ植民に学び、ガイアナを一つの拠点として始まったのである。

第二に、ポウエルの植民方法、さらには、後には、バルバドス島総督ウィロビー卿が試みたガイアナでの砂糖きびプランテーションの成功(二六五二)^⑨に見るように、ガイアナ植民と他の西インド諸地域との連携についてである。この点は、ローリーのガイアナ計画に遡って検討する必要があるであろう。ローリーは、ガイアナ計画を遂行する過程においても、ロス・コロニー(一五九二)に終わった彼の北米植民計画を完全に放棄したわけではなかった。^⑩では、一七世紀初頭、ローリーの関与なく、ロンドン、プリマス両会社によって再開された北米植民を、彼はどのように見ていたのか。自らが共に着手し、赤道を挟んで対称的な位置にあるガイアナ、北米両植民地の関係を、彼はどう考えていたのか。本論考では言及できなかったこの問題は、今後さらに検討を要する問題であろうかと思われる。

以上のことから、一七世紀初頭、西インドにおけるイングランド植民史の中で、ガイアナ植民は、極めて重要な役割を

果していたということができよう。商業革命の時代に大きな核となる西インド諸島植民は、ガイアナ植民から、そして、ガイアナを基点として、始まったのである。ローリーのガイアナ計画は、この流れの中で考えねばならない。彼の計画は、続く時代の植民者たちの青写真となり、西インドにおけるイングランドの発展を準備したのであった。

ガイアナ、その豊かな御足は黄金の鉱山、

その額は星の屋根を軽くたたき、

つま先でたたずむ。

美しきイングランドを見つめ、

豊満な胸をかかめ、その手に口づけながら

そして、我々の最も汚れなき女性の妹とも、

娘ともならんとして、

あらゆる恭順の仕種を示しながら。

ジョージ・チャプマン^⑩

- ① ウィリアムズ、前掲書、I、九〇頁。
- ② 同訳書、I、八九—九〇頁。
- ③ 本論考、第三章、注^⑩。
- ④ 西インド諸島植民に関する報告がガイアナ植民のそれを凌駕するのは、一六二〇年代後半のことである。A. P. C. pp. 51 ff.; C. S. P., pp. 27 ff.
- ⑤ Harlow (ed.), *op. cit.*, pp. lxxix-lxxxvii. 注^⑩。宮廷の派閥抗争もガイアナと西インド諸島の植民の成否を分けたと思われるが、

内政治、政策との関連については、今後の課題としたい。

- ⑥ Rev. Robert Thornton, 'A happy Shipwreck, or the losse of a late intended voyage by sea recovered by a Breife of this experience' 1629, in (ed. by Harlow) *Colonsing Expeditions to the West Indies and Guiana, 1623-67, 1924*, pp. 148-74. 一六二九年、ガイアナ会社に百ポンド投資してガイアナ植民に参加した同僚は、悪天候のために出航が延期された間に、ガイアナ会社の指針を検討し、会社の組織上の問題、特に年季契約移民の問題を指摘し、ガイアナ会社を助言するために同論文を著わした。しかし、それに對する回答が得られなかったため、ソートン師はガイアナ植民を断念したのであった。
- ⑦ Harlow (ed.), *op. cit.*, pp. xv-xxviii.
- ⑧ *Ibid.*, pp. xxviii-iv.
- ⑨ *Ibid.*, pp. lxxxvii-xciii, pp. 177-83. Lord Willoughby of Parham 注^⑩「ローリーの地で運だめしをする」ためにガイアナ植民を試み、スリナム川沿いにプランテーションを行なった。
- ⑩ 第一回ガイアナ遠征からの帰国に際し、ローリーはヴァージニアへ行くつもりだったが、悪天候でとうとう断念をせざるを得なかった。Raleigh, *Works*, vol. VIII, p. 394. 注^⑩。一七世紀初頭の北米植民に對するローリーの関心については、Quinn, *op. cit.*, pp. 212-39; Quinn (ed.), *op. cit.*, vol. 3, pp. 347 等を参照せよ。

① *Ibid.*, vol. 5, pp. 183 ff. 『イギリスの航海と植民』、五四六―五二頁等を参照。

② George Chapman, 'De Guiana, Carmen Epicum' より。

(京都大学大学院生

〔追記〕

なお、本論考脱稿後、『イギリスの航海と植民』二《大航海時代叢書第Ⅱ期第一八卷》岩波書店、一九八五年が公刊された。その中に収録された、平野敬一訳、増田義郎解題・注「ローリ、ギアナの発見」も、合わせて参照されたい。

mary phenomenon than in any other period, *hui meng* is a very useful material in order to understand the state of those days.

In this paper, at first I describe the process by which *hui meng* was getting more and more customary. Next, I consider the ceremony and the divinity in it. Finally, based on the analysis of the duties that *hui meng* caused among the interested parties, I make it clear that the fictitious brotherhood was produced. In those days people coped by *hui meng* with the condition that the order, which was based on the blood relationship, had been breaking down since *Yin* 殷 and the Western *Zhou* 西周 periods.

Sir Walter Raleigh's Guiana Design

by

Kumie Inose

Sir Walter Raleigh (1552-1618) is rated high in the English colonial history in North America, but his expedition to Guiana has not been duly appreciated because it was seen as a gamble in search of gold mine. But there leave rooms for reconsidering it, in relation to his aims and intentions in Guiana, by the different point of view from former studies.

So, in addition to making researches in Raleigh's major work on Guiana, *The Discovery of the Large, Rich and Beautiful Empire of Guiana* (1596), by analyzing closely his miscellaneous works, this paper brings a focus on the following points: the reason why he selected Guiana for his design; the detail of his idea; its limitation or the exact causes for his failure.

From these points of view, it becomes clear that Raleigh's Guiana Design was a strategic colonial theory in order to replace Spanish Empire by English Sea 'Empire'. And it is also recognized that, in the early seventeenth century, Guiana colony attempted by those who supported and inherited his design was the starting point of the history of the British West Indies.